
子守り唄

枯鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子守り唄

【Nコード】

N3323P

【作者名】

枯鈴

【あらすじ】

主人公は戯言シリーズ人間シリーズが大好きな子――

ある日彼女の願いが届いて――――

一話 《変わりたいと思うことは自殺…。》

「『変わろうと思う気持ちは、自殺だよね』か……」

私は一人しかない部屋で、一人呟く。

ベットに寝ながらの体制で本を私は読んでいた。私の愛読している本である。

私はこのシリーズの本を読みながら、文の中にある言葉を呟くのが日課。自分でも解るが、変な日課だと私も思う。しかし私は、外で元気に遊ぶことも出来ないし、家の中を出歩くことも禁じられている、私にしては、その日課を馬鹿にされるのは少し腹が立つ。

そんな私は、もう引きこもり少女だった。

この狭い部屋でしか、私は行動できない。部屋を一步、出るのも禁止されている。親が禁止しているので、いつか殺したい親になっている。そのいつか、がいつか解らないけど。

過保護な親の元で生まれて、何の利益があるのだろうか？それとも親というものは、みんな過保護なのか？世の中の子供たちは苦労しているのか……など、よく思考したものだ。

私はこの行動が制限されている私の世界で、ずっと変われないのだろうか？

そう……考えない方が良いことは知っている。だけど、この部屋にずっといると後ろ向きなことしか、考えられないのだ。

私はさっき呟いた言葉を、思い出す。

《変わりたいと思う気持ちは、自殺だよね》

その言葉は変わりたいと思う人にとっては、残酷すぎる言葉だと思う。でも、その言葉は何よりも納得できる言葉だった。

残酷過ぎるけど、気持ち悪いぐらい納得できた言葉だった。

私は、江本智恵えもと ともえみたいにもっと、誰かのようになりたいと強く思うことはないだろうけど、少しは変わりたい——否、少しでも前の自分と違いたいと思う。

その日はいつ来るのだろうか？

もう私のすぐ近くに来ているのだろうか？

今日も私は馬鹿げたことを考えていた——。

二話 《甘ったれないでください、見ているこっちが赤面します。》（前書き）

文が雑ですいません。

二話 《甘ったれないでください、見ているこっちが赤面します。》

私は昨日まで、ちゃんと私の部屋で寝ていたのに今、何でこんなところにいるのだろうか？

私の周りには、知らない風景が広がっていて、上には夜空らしきものがある。暗くて、よく見えないが外らしい。涼しい風が吹いて、時折肌寒かった。

そういえば、外なんて私は初めて見たのではないだろうか？私の部屋には窓はないし、部屋の外なんてなかなか出られるものではない。小さい時から部屋に閉じ込められていたわけではないが、小さい時に外を見た記憶さえもないのだ。外だと気づいた理由も、ただ単に《本や、テレビなどで見たから。》

だから、初めて本物を見たのだろうか？

そう思うと、嬉しい気持ちもあるのだが……。少し複雑な気持ちだった。

初めて外を見た感動を、味わっていると突然後ろから、声をかけられた。

「おじょうさん」

と、ふざけているような声で後ろから笑い声も聞こえる。

どうせ、後ろでニタニタ笑っているのだろうと、後ろを振り返って顔を見ようとした。

…………。

うん、世の中ってこんなに物騒だったか？いや、私は世の中の状況

なんて知らないけど、

そこらへんに、ナイフを握った男がフラフラしているのは普通なのか？

そう、私の後ろに立っていたのは、薄いナイフを片手にニタニタ笑っている男だった。ナイフは月明かりに照らされて、キラキラと怪しく光っていた。

「かねえ、もってないかなあ？」

ナイフがあることを分からせるためだろうか、ナイフを私の顔の真ん前に見せて言った。

少し近くに寄ったせいだろうが、きついお酒の臭いがいた。酔って、こんなふうになったのかね。

「えっと……私、持っていないです」

どれだけ服を探しても無かった。

代わりにあったものといえば……ナイフしかなかった。

刃物 多分13本

不吉な数だな、というか私はこんな危ないもの持っていた記憶はない。

「おい、もってんだあろお？」

「持ってませんよ」

「はやく……ひっく、ださねえっとお、ころしちまいまーすよ」
酔っていて、すぐに口調が変わる男は、ナイフを構える。酔っていて、構えにはなっていないかったが。

私は確実に殺されてしまう展開だった。

まあ、私はかっこ悪い命乞いをするほど、死にたくないわけじゃないから別にいいのだけど、もう少し外の———違う世界を見ていたかったなあなんて後悔する。
だけど、

「殺せばいいじゃないですか……こっちはもう死ぬ準備ぐらいできてますから」

いつ死んだっておかしくない身体、死ぬときの心構えぐらいできているから。

私は男を睨みながら言った。

三話 《私は殺人犯ではありません、殺人鬼です。》（前書き）

短い上に、乱文でさえいけません。

三話 《私は殺人犯ではありません、殺人鬼です。》

「……………え……………何で…」

私は目の前にあるものに、驚いていた。

赤くて赤い液体が赤い物を中心に、広がっていく光景に。さっきまで生きていた人が、《私のせいでただの物になっていく光景に。》

そして、私がさっきまで持っていたナイフが、赤い物に刺さっていること。

私はあの一瞬に何をした？何をやったのか、理解できない。

男が私を殺そうとして、私にナイフを刺そうとしたところまでは憶えているが、その後にあったことがどうしても思い出せない。気がつけば、私が男を殺していた。

正反対のことが起きていた。

あはは、実は自分が零崎で、覚醒したときに殺した、とか？
まさか、ね。

今は殺した理由より、これからどうするかを考えなきゃいけないの
だけ。

これから、か……。家に帰っても暇ただけだしな、というか家がどこにあるのか分からない。

この年で、迷子とか恥ずかしいな。

いや、家に戻ったらもう、外に出られなくなるからなあ。やっぱり、やめようかな？

家出しようにも、私の病弱な体じゃあすぐ倒れてしまうし。
しかも、もう体がだるい。

どうしようかなあ……。

「これは派手にやったちゃんなあ……」

その声は唐突に、後ろから聞こえた。

私がよく知っている口調で、驚きながら後ろを見る。

「それで、血の一滴もついてないちゃか……」

牧歌的な格好で、頭に麦藁帽子。ラムちゃんみたいな口調で、手には釘バット。

その釘バットは愚神礼賛シームレスバイアスと呼ばれるもので、愚神礼賛を持っている男は、シームレスバイアスと呼ばれる男。

零崎軋識だった。

四話 《壊して、作り直した世界は、さぞかし美しいでしょう。》（前書き）

短いうえに文が整っていないくて、すいません。

四話 《壊して、作り直した世界は、さぞかし美しいでしょう。》

今……私の目の前にいる人は、だ、誰でしょうね…………。

だだだだだ誰かなな？

慌てて、少し目が泳いでいた私だった。

「俺はこういうふうになるから、嫌なんだっちゃ。まあ、レンが今より、もっと変態になるのは確実っちゃな」

「あ、あのー」

「はあ、レンの真似をするのも嫌だっちゃが……」

一人で愚痴を言っていて、聞こえていないようだった。

そして、なんか苦勞しているなあと、同情すらできたり、できなかったりする愚痴を約数分間、私は聞かされてしまった。

その愚痴の内容は、ほとんど双識さんらしい。

私は落ち着いてきた頭で、冷静に考えてみるが、現実的な答えが浮かばなかった。

唯一浮かんだ言葉が

《トリップ》

さっきの愚痴、あんなの本人ぐらいいしか言えないのではないかと、それに私は人を殺して…………その後に零崎軋識さんは来た。

つまり、私には零崎…………。

…………。

だんだんと、自分が考えていることが恥ずかしくなっていくのは気のせいだろうか？

多分、気のせいではないと思うが。

確かに、今考えていることは冷静な頭で考えているとは、到底思えない考えだ。

「あのー、私に何か？」

現実的に、あくまで現実的に考えようと、声をかけた。

もう現実的に考えられない頭で、真面目に考えようとするたびに恥ずかしい考えが、浮かんでくる。

「あ、そうだったちゃ、

名前何ていうっちゃ？」

え？名前？

私は迷いながらも、

「ひつぎです」

と、答えた。

「そうじゃか、それじゃあお前は、今日から零崎だっちゃ」

「……………」

零崎って……………

そんなにさっぱり、決めていいものだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323p/>

子守り唄

2011年1月3日19時43分発行